



Title	＜研究ノート＞文通するニューレフトたち：1980年代の核兵器・核エネルギー問題をめぐって
Author(s)	山田, 雄三
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2013, 2012, p. 37-41
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77384
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【研究ノート】文通するニューレフトたち

——1980年代の核兵器・核エネルギー問題をめぐって——

山 田 雄 三

1. はじめに

2011年3月11日に起きたことを語ることを、まだわたしたちはもてずにいる。当面は、ここまで知りえたことをかき集めながら、わかりやすい「ポスト（以降）」の言説に包摂されることを拒むほかないだろう。そうした時間のかかる手続きを経ないかぎり、「3・11」を新たに語り始めることはできないような気がする。「3・11」以降に「フクシマ」の問題と直面したわたしたちは、核エネルギーとわたしたちの関係を深刻に問い直している。核エネルギーの平和利用が大々的に推進された1980年代の言説を振り返るとき、そこには「3・11」以降の日本の社会がよくよく考えなければいけない議論が残されている。この短い研究ノートでは、イギリスのニューレフトの創始者レイモンド・ウィリアムズ（Raymond Williams, 1921-1988）と80年代レフトの論客であった芝田進午（1930-2001）の往復書簡を眺め直してみたい。

2. 芝田進午とウィリアムズの往復書簡

芝田進午といえば、アカデミックな領域にあってはマルクス主義の立場から核時代の世界構造を哲学的に探求するかたわら、現実的な核兵器廃絶への道筋を示しつつげたアクティヴィストでもあった。その芝田進午は、1975年より「マルクス主義研究セミナー」を主宰し、国内外から多くのニューレフトを招くほか、文通による意見交換を行うなどの活動を行っていた。イギリスを代表するニューレフト、レイモンド・ウィリアムズは1981年6月28日付けで芝田に書簡を送っている。その書簡は、セミナーの年報『社会科学研究年報』1981年版に「核軍備撤廃の展望」というタイトルを付けて発表されている。1980年代の初頭は「キューバ危機」以来のきな臭いムードが世界を覆っていた。ソ連のアフガニスタン侵攻とそれへの制裁措置としてのモスクワ五輪ボイコットが起きていたし、1981年1月にはレーガノミックスと軍拡で合衆国を強引に牽引するレーガン政権が誕生していた。レーガンはスター・ウォーズ計画を推し進め、専守防衛の立場は取らずに、先制攻撃も辞さない姿勢を取っていた。多くの人が核戦争勃発を危惧し、大国間のデタントを望んだが、芝田とウィリアムズは違っていた。彼らは物質的な条件をつねに念頭に置きながら、平和に

について考察している。芝田への書簡のなかで、ウィリアムズは世界経済が依然として帝国主義（もしくは新植民地主義）のモデルで動いていることを指摘して、次のように述べている。

一方に平和および軍備撤廃の運動があり、もう一方にそれと同じくらいに必要な運動、つまり貧困と飢餓をグローバルに再生産している国際経済秩序に異議を唱える運動がある。このふたつをどう結びつけるべきかという問題は、今日すべてのマルクス主義者に投げかけられた理論上実践上、最大の挑戦状である。¹

ウィリアムズにとって、平和の難敵は合衆国の軍需独占資本であった。それがグローバルに覇権を握っている。リソースが少なくインフラも整わない発展途上国の軍事政権は、国家財源の大部分を軍事費に当てて、合衆国が生産する兵器や軍事技術を購入していた。そのため発展途上国では、福祉や食糧生産への政策が貧弱となり、痛ましいほどの貧困と飢餓が生じていた。レーガン＝サッチャー主義のタカ派政策への反発から、「ポーランドからポルトガルまで」を非核武装地帯にしようとする市民運動が起きていたが、その動きと脱帝国主義運動とを連携させることの重要性を、ウィリアムズは主張している。

実はこの発言は英訳された芝田のふたつの論考、「核兵器廃絶とマルクス主義」と「核兵器廃絶とマルクス主義・再論」を読んだウィリアムズが、芝田を支持しての返答であった。芝田は「核兵器廃絶とマルクス主義」のなかで、核兵器廃絶の実現を阻んでいるハードルを七項目にわたって具体的に列挙している。その二項目で芝田は、「当然のことながら、同じく厳格な国際査察のもとに、既存の原子力発電所とそこで生産される放射性物質をいかに管理し、処理するか」を課題として挙げている。² 「3・11」を経験した後も、この課題は「現実的になれ」という声に依然として抹殺されつづけている。しかし、それ以上に重要な指摘もある。七項目のなかでも次の指摘は物質的な条件に目配りがなされており、わたしたちの目を引かずにはおかない。

核兵器廃絶が現実実現されれば、それらを生産してきた軍需独占資本ならびにそれらを中心とするアメリカの国家独占資本主義、さらに世界資本主義は未曾有の不況におちいるであろうが、その結果もたらされる失業者の増大、中小資本の破産、人民の零落をどのように阻止するか。それらの軍需独占資本をどのように民主的に統制するか。³

今日の目で見ると、この問題意識はひじょうに重要なものだとわかる。世界経済が「未曾有の不況」に陥る前に合衆国は先手を打っていた。「軍需独占資本」の一部を「原子力独占

¹ Raymond Williams Archive WWE/2/1/16/320. これを日本語に訳した文章が、『社会科学研究年報』第5号（合同出版、1981年）に掲載されている。

² 『マルクス主義研究年報』第二号（合同出版、1978年）、11頁。

³ 同上、12頁。

資本」にすり替え、核兵器をもたない（もてない）国との取引を始めていた。「3・11」を経験した今、どうしても悔恨の思いで振り返ってしまう。わたしたちは、いつどこでウィリアムズや芝田の問題意識を継承しそこなったのかと。原子力独占資本を民主的に統制することはできなかったのかと。

3. ジョン・サマヴィルと中野好夫の「政治と文学」

英文学者で評論家としても知られた中野好夫（1903-85）は平和問題に関して積極的な発言を行っていたが、芝田のセミナーにも参加している。彼は芝田の勧めでジョン・サマヴィル（John Somerville, 1905-94）の戯曲『人類危機の十三日間（*The Crisis*, 1975）』を翻訳し、宇野重吉の劇団『民芸』により世界で逸早く舞台に上げている。これは1962年の「キューバ危機」をドキュメンタリー調で描いた芝居で、芝田の旧知の友人で民主主義思想の専門家であったサマヴィルが、はじめて戯曲のかたちで発表したものであった。種本となったのは、1968年にはじめておおやけになったロバート・ケネディ報告。彼が凶弾に倒れた後、一切の証拠文書を含めて明らかになった国家安全保障会議執行委員会（エクス・コム）の記録であった。核戦争の危機がもっとも高まった十三日間に、ジョン・F・ケネディ大統領や彼の弟で司法長官のロバートやCIA および軍幹部が、ソ連の提案を国家の威信という観点から拒絶し、核戦争の準備を進めるものの、ソ連がキューバから撤退という予期せぬ展開により、核戦争を紙一重のところで免れるまでのプロセスを舞台化したものであった。そもそもソ連側の提案とは、合衆国がトルコのミサイルを撤去するのと交換条件で、ソ連もキューバから撤退するというものであった。エクス・コムは思考の迷路に陥っており、その提案を合衆国への脅しとしか解釈できない状況に陥っている。究極の危機状況のなかで機能不全となるエクス・コムだが、それを相対化する人物として、たまたまインターンとして大統領執務室で働いていたスティーヴという法学生が登場する。彼は恋人を前にして、まるでリア王のフールのように、直截に思ったことを口にする。

ところが、いま現に戦争への決定をやろうとしてるのは、誰なんだね？国会じゃない。大統領と、彼が任命した、ほんの一握りの助言者たちだけなんだぜ。それにまた、その決定の仕方ってのが、どうだね？決して公然たるそれじゃない。閉ざされた密室の中で、国民も国会も知らぬまに、すすめられてるんだ。実に恐るべきやり方だよ、世界を亡ぼすね。

4

これを翻訳した中野好夫は、サマヴィルがこの素材を扱うに際してなぜ戯曲のかたちを選んだのかを話題にして、「おそらく「まえがき」にもある「現代政治と現代演劇とが、その

⁴ ジョン・サマヴィル『人類危機の十三日間—キューバをめぐるドラマ』、中野好夫訳（岩波書店、1975年）、75頁。

現実への連帯を示すべきだとする作者の信念が、そうさせたもの」と述べている。⁵ 地球の行く末が密室で一部の人間だけによって決定されることの愚かさについては、現代演劇というフォーラムで、観客とともに考えていくべきだという思いを、おそらくサマヴィルと中野とは、ともに共有していたのだろう。

さらに中野は、サマヴィルが来日して芝田のセミナーに参加した際に、セミナーに招かれて、この戯曲について講演を行っている。その講演の最後、中野は奇遇にもウィリアムズとまったく同じことを述べている。1960年代から、ウィリアムズはリュシアン・ゴールドマン（Lucien Goldmann, 1913-70）の「未検証の現実」という発想を引き継いだ仕事に努めてきた。ひょっとするとわたしたちは、選別されて可視化された要素だけをもとに抽出された「現実」を絶対的な事実としての現実と思い込んでいるだけかもしれない、と考えた。そして「未検証の現実」が発現する場として、ドラマ上演の場（それは、劇場だけにかぎらない。映画館やテレビドラマが鑑賞される居間であってもいい）をとらえていた。中野もまた、メディアが使う「現実的であれ」ということばの恣意性を指摘しつつけたウィリアムズと同じ視点から、次のように語っている。

戦争の危機がたかまってきますと、よく「現実的であれ」、「現実を考えなくてはい」という声が必ず出てきます。ここ数年の日本でもその声がだんだん高くなってきていること、これは皆さんもきっとお気づきでしょう。有事立法をめぐる論議にしたところで、明らかにそれです。現実を考えなくちゃなんというのも、一応尤もにはちがいありませんが、人類絶滅の危機をさえはらんでいるこの問題についてだけは、断じていわゆる現実的であってはなんと考えます。非現実的でかまいません。その意味で馬鹿である必要があると思うのです。⁶

中野はこう前ぶりをしておいて、トルストイの『イワンの馬鹿』を引き合いに出して、1980年代の保守的な思潮（有事立法賛成論や元号法制化など）が声高に訴える「現実的になれ」というかけ声を批判する。そして次のようなことばで講演を終えている。

これらの右旋回の奥に、そして底にあるものは、明らかに一見もっともらしい「現実的」という考え方だと思います。すでにそれは恐ろしい力で動きつつあるように思われます。皆さんにもお願いしたいのですが、わたくしもまたこの際、いっそう非現実、つまり、もっともっとイワンのように馬鹿でなければならんと厳しく自戒に努めているつもりです。ありがとうございました。（拍手）⁷

⁵ 同上、170-1 頁。

⁶ 『マルクス主義研究年報』第三号（合同出版、一九七九年）、121-2 頁。

⁷ 『マルクス主義研究年報』第三号（合同出版、一九七九年）、122 頁。

1980年代に中曽根政権下に原子力発電が推進されたとき、わたしたちはおそらく「現実的」でありすぎたのだろう。原子力を平和的に利用して、日米の安全保障を底で支えることこそが「現実的」であるとみずからを納得させたのかもしれない。今になって中野の「馬鹿であれ」という諫言が重く響いてくる。

4. 終わりに—乖離する現実

「3・11」以降、「リスク管理」や「グローバル化」を論じるおびただしい数の本が出版された。わたしはしばしばこうした本に触発されて、ウィリアムズ自身の文章を読み直してみる。そんなときはきまって、わたしはやはりウィリアムズにある種の（リアルタイムで経験していないのだから妙だが）ノスタルジーを感じてしまう。そればかりか、わたしたちの社会がウィリアムズから遠く離れてしまったという思いに駆られてしまう。なぜなら、彼が見つめると言いつづけた「現実」と現代のメディアが伝える「現実」には大きな隔たりがあるからだ。ウィリアムズにとっての「現実」は、階級や民族、ジェンダーのチャンネルを可能なかぎり開いていくなかでようやく微かに見えてくる視界であった。それは容易に到達できない目標点であったばかりか、到達したと思うとまた別のところに移動する性格のものであった。他方で、今日のグローバル化した世界では、「現実」はグローバル経済システムを潤滑に動かすためのフローシートのようなもので、それをよく理解している人が「現実」的だと考えられる。この新しい「現実」観に照らしてみると、ウィリアムズが言いつづけてきた「現実」的になれという提言は、まったく的外れで非現実的な妄言にすぎなくなる。ウィリアムズや中野好夫が見すえた「現実」と今日の「現実」とは、もはやすり合わせが不可能なぐらいに乖離してしまったのだろうか。